スキマタイムズ

もっとお互いを理解するための場や時間を

日本自立生活センター自立支援事業所　2020年1月28日発行 第106号

Valentine Day 映画会

2020年2月14日（金）

13:00 開場　13:30～上映

15:10～座談会

場所：

京都市地域･多文化交流ネットワークサロン

参加費：1,000円

映画を見たあと座談会を行います。地域で自立生活（一人暮らし）をしている人、目指している人・目指していない人、考えられない人たち、ワークスのメンバーを中心にみんなで「地域生活」について座談しましょう。

問合先：

特定非営利活動法人 日本自立生活センター

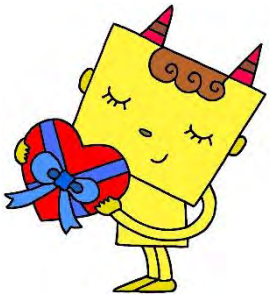
ワークス共同作業所

TEL:075-682-3201 FAX:075-682-3330

E-mail:info@kyoto-j-works.com

こころとからだをすっきり！ヨガタイム

ヨガで自分の身体と向き合ってみませんか？ヨガの目的はきれいなポーズをとることではありません。その日の身体がどんなふうに動くか動かないか、意識を自分に向ける時間です。呼吸が深くなり、肩こり、腰痛、疲労感もやわらぎます。もちろん腰痛予防にもいいですよ！　ぜひ参加してみてください♪　講師は石田久美さんです。



★ヨガ：全身をうごかすヨガ

日　時：２月１０日（月）

１７：００-１８：１５（OPEN１６：４５）

場　所：油小路事務所２F

持ち物：動きやすい服装・タオル・飲み物

参加費：無料

＊このヨガクラスは、JCIL自立支援事業所の利用者と家族・介助者を対象にしています。

日本自立生活センター自立支援事業所　編集担当：岡山・春木

TEL：075-682-7950　E-mail：jcil-kyoto@jcil.jp　URL：http://www.jcil.jp/zigyosho/index.html

居場所づくり勉強会第 58 弾
「障害者の主体性ってなんだろう?
介助者手足論と〈強い障害者像〉を超えて」
に参加して

伊藤 慧

～前回からの続き～

私自身、介助者はまず何よりも障害者の指示を遂行する手足であるべきと考え、出すぎたことをしないようにと斜め後ろを意識して指示を待ってきた。また、「これからどうするんですか?」、「ぼくは介助者なのでそれは自分で決めてください」など(自分の意見を抑える意識を持ちながら)様々なことを聞き、指示を仰いで来た。指示を待ち、時には指示を仰ぐこと。どちらも主体的な生活を守るためには不可欠な原則であり、この意識がなければ介助とは名ばかりのものとなってしまうだろう。

ここで油田さんの言葉を振り返ってみたい。障害者として主体的に自立生活を送っていくには、『死ぬまで一生指示し続けなければならないのかと絶望を感じた』。

障害者に「指示を待ち、指示を仰ぐ」存在である私は、この絶望を認知してきたただろうか。“主体性”という言葉の裏にあったこの感情を想像してきただろうか。この感情は障害者が介助者を使って主体的に生きる上では、あって当たり前、致し方ないものなのだろうか。介助者の一人としてもう少し考えていきたい。

最後にこのエピソードを紹介したい。 ある日、油田さんの介助者が A さんから B さんに急遽変更することになった。この報を受けて油田さんは『今日はシャワーにしようと思ってたけど、B さんが介助に来るんだったら今日は湯船に入ろうかな』と気が変わった自分に気づいたそうである。誰が介助者であろうと左右されることなく主体的に自分で意思決定をしてきたつもりの油田さんだったが、実は誰が介助者であるかによって意思決定に影響が出ていたようである。

誰が介助者であろうと障害者の意思決定、指示は遂行されなくてはならない。これに間違いはないだろう。ただ、油田さんのエピソードにあるように、主体的に決定したはずの意思が、実は介助者が誰であるかによって少なからず影響を受けていることもあるようだ。

私はここに介助者としての難しさや居心地の悪さと同時に、私が介助者である意味やあなたが介助者である意義があるのではないかと今考えている。

“誰が”介助者であろうと、障害者が介助者の顔色を伺うことなく(介助者としては伺わせることなく)指示や意思表明し、それぞれが主体的な生活を送れるようにその人の「する」を守ること。これは介助者に求められた最低限の仕事だと思う。そして、最低限の仕事のその先に、“わたし”が介助者である意味も“あなた”が介助者である意義もあるのだろう。

この勉強会を通して、介助者は障害者の「する」を保障していくことだけでなく、「する」の幅を拡げていくこと、よりよい「する」を一緒に目指していくことができるのではないかと考えている。

障害者と介助者。お互いに名前のある代替わりのきかない 1 人の人間として関わりを続けていく方法をこれから模索していきたい。そして、「必ずしもあなたでなくてもいいが、あなたでなくてはだめ」という介助者像を模索しながら介助を続けていければと思っている。

以上、「結局“主体性”ってなんだったの？」と落ちとまとまりのない論考になってしまったがご容赦いただきたい。

尚、構想段階ではありますが来春から介助者による介助の当事者研究?のようなものを始められたらと勝手に思っています。興味のある方いらっしゃったら是非お声がけください。というより、一緒にやりましょう。

P.S.勉強会では油田さんが〈強い障害者像〉に対して生じた違和感を当事者研究の考え方や中動態という概念を用いて解きほぐしていった様が語られましたが、ここでは論じきれないので割愛させて頂きます。ものすごくいい講義だったので是非 2 回目もよろしくお願いします。

介助の TiPS

～ちょっとしたコツ・小ワザ～

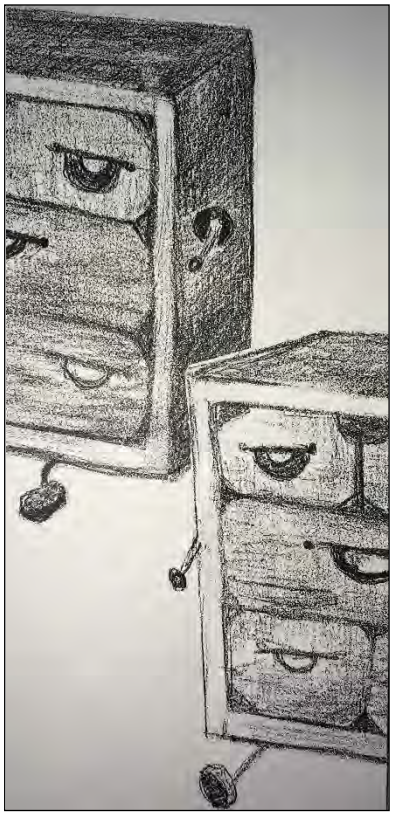
Naoki Hashimoto の
「タンス哲学（片づけの愛と自由）」（仮）

みなさんは服のたたみ方をどうされているでしょうか。襟（えり）に合わせて三等分におり、それから丈が半分になるようにたたむだとか、襟から半分におり、それを丈が半分になるようにたたむとか、三等分におり、それを丸めるようにたたむなど、人それぞれにたたみ方はあると思います。

けれども、その「人それぞれ」は本当に正しいのでしょうか？その正しさにある基準を与えてくれる存在にみなさんはお気づきでしょうか。そう、その存在こそタンスです。

たたみ方に基準を与えるのは、実はタンスの大きさ。引き出しの大きさなのです。どんなに「たたみ方はこうだ！」と言ったところで、引き出しのサイズに合わなければ、うまくはいりません。たたんだ服を並べるにしても、引き出しに収まるようにしなければ、スペースに余りができたり、クチャッとなったりするのです。

ここまで話せば、ピンと来る方もおられることと思います。そうです。われわれが考えなければならないのは、「タンスの主体性」。服をしまう当のタンスの声を聞いてこそ、服のたたみ方に確固たる基準が生まれるのです。　～つづく～



挿絵：下林慶史

小松食堂

アンケートＢＯＸを小松食堂の時に置いています。
リクエストお待ちしています！

二月の献立

三日（月）
ピビンパ丼
スープ

二十七日（木）
おでん
ご飯

どなたでも参加できます。
場所は「松の間」
いずれも一七時から
参加費　三二〇円

第 34 回 国際障害者年連続シンポジウム

自立生活運動・オープンダイアローグ・当事者研究

相模原事件、深刻な介助者不足、進まない脱施設、地域間格差、障害者と介助者の人間関係の行き詰まり、地域で暮らし続けることの慢性的な悩み、障害の重度化や多様化、高齢化、介助者たちの痛み…自立生活運動は今、新しい課題に直面しています。精神障害や依存症などの分野で注目を集めているオープンダイアローグや当事者研究のアプローチを通して、現状の課題についてみんなで学び、語り合いましょう。

詳細は JCIL ホームページへ！

【日時】2020 年 2 月 8 日（土）11:00（10:30 開場）～17:15

【場所】立命館大学 衣笠キャンパス 創思館 1F カンファレンスルーム

会場への行き方は立命館大学のホームページへ→

車いす使用者等のために、JR 円町から立命館大学まで送迎車も用意します（有料、先着順）。申込みは下記連絡先へ。

【参加費】500 円　【主催】「国際障害者年」連続シンポジウム運営・実行委員会

【共催】立命館大学生存学研究所　【連絡先】南区東九条松田町 28 メゾングラース京都十条 101 日本自立生活センター（JCIL）気付

Tel：075-671-8484　Fax：075-671-8418　メール：jcil@cream.plala.or.jp

◆ 出演者の紹介 ◆

熊谷晋一郎さん（基調講演）： 脳性まひの当事者として自立生活運動に大きな影響を受けつつ、現在、「当事者研究」をテーマに、隔離、スティグマ、発達障害、依存症、刑務所などの課題に新機軸を開いている。東京大学先端科学技術研究センター准教授、小児科医。著書多数。最近では、雑誌「臨床心理学」増刊号にて、「当事者研究」3 部作の編集にあたった。

竹端寛さん（ファシリテーター）： 精神医療、あるいはこの社会にある隔離や抑圧からの解放をめざす「対話（ダイアローグ）」の、研究者にして実践家。竹端さんのファシリテートによる対話集会はぜひ多くの人に体感してほしい。兵庫県立大学環境人間学部准教授。『「当たり前」をひっくり返す―バザーリア・ニィリエ・フレイレが奏でた「革命」』（現代書館、2018 年）など。

小泉浩子さん： 幼少時の黄疸による脳性まひ当事者。現在、日本自立生活センター自立支援事業所管理者。重度知的障害者や難病者など障害種別をこえた多くの自立生活の現場に関わり、そこでの複雑な人間模様を誰よりも身にしみて味わっている障害当事者の一人。共著に『障害者運動のバトンをつなぐ』（生活書院、2016 年）。

立岩真也さん： 障害者自立生活運動を世に知らしめた第一人者。最近も筋疾患系障害者への聞き書きを精力的に進め、運動に貢献している。立命館大学大学院先端総合学術研究科教授。自立生活運動、筋ジス病棟、ALS、精神障害、相模原事件、自己決定などをテーマに著書多数。近刊に『弱くある自由へ（増補新版）』、『病者戦後史』（いずれも青土社）など。

岡山祐美さん： 10 代半ばで進行性筋疾患（遠位型ミオパチー）発症。徐々に歩けなくなり、20 歳半ばで仕事もやめ、実家で生活。その後「自立生活」という選択肢を知り、舞鶴市から京都市へ。現在、24 時間介助利用、日本自立生活センタースタッフ。「筋ジストロフィー病棟の未来を考えるプロジェクト」の中心メンバーの一人。

油田優衣さん： 全身の筋力が次第に衰えていく SMA II 型（脊髄性筋萎縮症 II 型）の当事者。福岡県出身で京都大学に在学する若手障害当事者のホープの一人。日本自立生活センターでも活動。論文：「強迫的・排他的な理想としての〈強い障害者像〉―介助者との関係における「私」の体験から」『臨床心理学―当事者研究をはじめよう』，金剛出版，増刊第 11 号

渡邉琢さん： 日本自立生活センター事務局員にして、介助者、介助コーディネーター。知的障害者の当事者団体ピープルファースト京都の支援者もつとめる。介助者や支援者という立場から、自立生活運動の課題を幅広く考察している。近刊に『障害者の傷、介助者の痛み』（青土社、2018 年）。